

令和5年度第2回京丹後市韓哲・まちづくり夢基金運用委員会 会議録

1 開催日時 令和6年1月29日（月）14時00分～16時00分

2 開催場所 京丹後市役所（3階）302会議室

3 出席者氏名

（1）京丹後市韓哲・まちづくり夢基金運用委員会委員（6名中5名出席）

出席：行待佳平 委員長、田中匡代 副委員長、今井みどり 委員、小谷順一 委員、
川口勝彦 委員

欠席：藤井崇史 委員

（2）事務局、関係部局

川口誠彦 市長公室長

松本晃治 市長公室政策企画課長

北尻 光 市長公室政策企画課係長

西村 隆 教育委員会事務局教育総務課長

吉岡祥嗣 教育委員会事務局教育総務課長補佐

金子隆行 教育委員会事務局学校教育課主幹

上田明子 教育委員会事務局学校教育課係長

松本祐奈 教育委員会事務局学校教育課主任

安達 純 教育委員会事務局生涯学習課長

下戸裕子 教育委員会事務局生涯学習スポーツ推進室長

4 議事等

（1）委員長あいさつ

（2）議事

ア 基金運用益等の状況について

イ 令和5年度基金運用益等活用事業の実施状況について

- ・グローバル人材育成事業
- ・韓哲・まちづくり夢基金事業補助金
- ・高等学校全国募集入学生応援事業
- ・第3回京丹後市民陸上記録会
- ・京丹後市文化芸術振興計画及び文化庁移転に伴う文化芸術推進事業

ウ 令和6年度基金運用益等活用事業（案）について

- ・グローバル人材育成事業
- ・遠隔教育実施事業
- ・韓哲・まちづくり夢基金事業補助金
- ・高等学校全国募集入学生応援事業
- ・第4回京丹後市民陸上記録会
- ・京丹後市文化芸術振興計画及び文化庁移転に伴う文化芸術推進事業

- (3) その他
- (4) 副委員長あいさつ

5 公開又は非公開の別 公開

6 傍聴人の人数 0人

7 要旨

≪議事経緯≫

(1) 委員長あいさつ

昨日、近畿の280ほど自治体がある中で、減少率が一番高いのが奈良県で約十年後には半分、京丹後市においても4万人を割るという予測を目にした。近畿の中で唯一大きく増えていた明石市でも減少するとされており、女性の人数が限られている中では、人口移動でしか増えないような印象があり、その先がさみしいように感じる。

韓哲・まちづくり夢基金は、子どもたちに希望を持ってもらいたいという想いの中で、人口減少に歯止めをかけるためには様々な対策が必要だろうと考えており、自分自身の事業についても対策を講じていく必要がある。これからは様々な事業が様々な分野で行われ、本日も提案があるが、どうやって人と市が成長していくか、論議の必要があると考えていた。あまり関係のない話で恐縮だが、あいさつに代えさせていただく。

(2) 議事

ア 基金運用益等の状況について

(説明) 資料に基づき、事務局から説明。

(質疑応答) なし

イ 令和4年度基金運用益等活用事業の実施状況について 資料2、資料2-1

ウ 令和5年度基金運用益等活用事業(案)について 資料3

(説明) 資料に基づき、各担当課から令和5年度事業の中間報告と令和6年度事業の提案。

(質疑応答) 各事業に関する質疑応答は下記のとおり。

【遠隔教育実施事業】 資料3

(委員) 事業内容の中段に「新たな教育や人材育成を地域とともに一体的に構築していくための在り方について検討を行っている。」と抽象的に書かれているが、具体的な内容についてお聞かせ願いたい。

(学校教育課) 本日記者発表を行ったところだが、昨年より京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会を立ち上げており、本市がどのように体系的に人材育成・教育を進めていくのかについて外部の有識者にご意見をいただき、検討会のまとめを本日記者会見で発表した。そこでグローバル人材をはじめとする教育を実践していくということで書かせていただいている。

- (委員) 記者発表をされたということだが、丹後学とどう絡めて、たとえば地域や行政のイベントに積極的に参加して進めていくなどの具体的な内容について教えて頂きたい。
- (学校教育課) 丹後学をはじめとして、校外学習や探究学習を進めており、今も企業等にお邪魔して様々な学習を進めているが、今以上に地元企業や地域と学校が繋がって、地域の素晴らしさや伝統産業を子どもたちに伝えていくようなことを考えている。
- (委員) 現在の教育課程では週何時間の授業数なのか。技術の専門教科を持つ先生が少なくなっている一方、専門性が重視されている中で、丹後では他の教科を担当しながら専門性の求められる教科を教える先生は多いと思うが、そういった先生が研修を受けられるのか、先生への責任が重くなっているように感じる。国の主導でコンピューターが導入されるときにも、学校、現場が対応に苦慮したこともある。難しいことはせず、わかりやすく楽しくやれるような授業でなければいけないと考える。
- (委員) 講師対応が1名とあるが、本当に1名で対応されるのか。市内の中学校は6つあり、それを1人の先生が遠隔で対応されるということか。
- (学校教育課) 来年度予定されているのは、6つあるうちの1校での導入を予定しており、将来的には広げていくことを想定している。
- (委員) 講師は企業の技術者で教員免許を持っておられる方か。
- (学校教育課) 現在調整を進めているのは、昨年度まで学校で技術科を教えており、現在は一般の企業に勤めている方である。
- (委員) 導入予定の市内の1校というのはどこか。
- (学校教育課) まだ学校側には、直接伝えておらず、校長会において構想を伝えている段階。そこでは子どもたちにとって高度な専門性を学べる良い取り組みだとお伺いしている。
- (委員) 試験的にされるうえで仕方がないことかもしれないが、そういった授業を受けられない子どもたちに対してはということはないのか。
- (学校教育課) 現在はこういった形で進めさせていただき。来年度から広げていくという考え。
- (委員) これは何年計画なのか。
- (学校教育課) これは、国の制度を活用したものであるもので、現時点では不明。
- (委員) 国の制度で学校側は大変困った経験がある。子どもたちが興味を持っていけるような簡単なものでよい。本当に子どもたちのためになるやり方であれば進めていただきたい。
- (学校教育課) 色々ご心配いただいているが、GIGA スクール構想で一人一台タブレット端末を日々学校で使用しており、子どもたちにとっては全国的に当たり前なものになっている。
- (委員) 高度な教育を遠隔で生徒や先生が受けられるものだが、市内の事業者の技術力で賄えないのか。市外の業者に頼む必要があるのか。地域の業者と一体的にしたほうが市のためになるのではないか。
- (委員) 国の制度ということで市も苦しい部分があると思うが、運用の仕方について

てはそれぞれで工夫する余地があると思うので、市内の技術力を借りることも考えていただきたい。

(学校教育課) 一点訂正としては、事業制度自体が国から下りてくるものではなく、市が国の制度に申請したもの。

(委員) そうであればもっと柔軟に国の制度を取り入れていただきたい。

(委員) 委員の意見としては地元企業やその技術力をおろそかにしないでいただきたいというもの。

【韓哲・まちづくり夢基金事業補助金】資料2 資料3

質疑等なし

【高等学校全国募集入学生応援事業】資料2 資料2-1 資料3

(委員長) 募集生徒はレスリング部に限定されているのか。

(教育総務課) 募集要項の中で決められている。

(委員) 緑風高校の新体操部も力を入れて取り組まれていると思うが。

(教育総務課) 今回制度の中では、全国部活動特別入学選抜ということで全国から募集される丹後緑風高校網野学舎のレスリング部を対象とするものとして成立している。新体操の状況を把握していないが、現在全国募集をしている中で、支援をさせていただいている。

(委員) 京都府内のほかの高校では同じような全国募集をされている高校はあるのか。

(教育総務課) 須知高校ホッケー部、北桑田高校自転車競技部において全国募集がなされている。

(委員) 1校から2つの部活動が全国募集することは難しいのか。

(教育総務課) 募集要項の中でそういった取り決めになっているのかは把握していない。

(委員) 新体操の学生も頑張っているという話を聞くので、レスリング部だけでなく、京都府でも数少ない新体操部も募集ができればと思う。

【京丹後市民陸上記録会】資料2 資料3

質疑等なし

【京丹後市文化芸術振興計画及び文化庁移転に伴う文化芸術推進事業】資料2 資料3

(委員) アートフェスティバルのパンフレットはどのようなところに置いているか。

(生涯学習課) 市役所はもちろん公民館など、公共的な施設に設置しているほか、全戸配布も行っている。

(委員) 市外には置いているのか。

(生涯学習課) 関係のある綾部市や長岡京市などの公共施設には送っている。全戸配布も行っていることから冊数的にも市外にはあまり配れていない状況。

(委員) 市外の人が見たことがないという話も聞いているので、市外の施設など文化の関係のあるところに設置することも検討いただきたい。

(生涯学習課) ホームページやInstagramなどでも発信していたが、市外の方に届いていないので、次回検討させていただきたい。

(委員) 広報にもっと力を入れ、より多くの人に参加していただくべき。

(委員) アートフェスティバルはこれだけのことをしているのにもったいないという気持ちがある。3年計画ということで、少しずつ根付いていけばと思うが、全戸配布も考えようではないかと感じた。今後継続を考えている中で、市外の方に対して知っていただきたいという気持ちもあるが、参加者となる市内の方への広報を頑張っていたいただきたい。

(委員) 海外では、パンフレットはあまり見ない。QRコードで読み込むのが主流となっている。これだけの費用があるのであれば、QRコードにして情報としての映像などに力を入れたほうが良い。時代にあわせて、広報の方法は少し考えていただきたい。

(3) その他 資料 4

(説明) 資料に基づき、事務局から説明。

(質疑応答)

(委員) 補助金交付要綱の中で、3年間など期間の基準を持たせるのが良いと考える。委員としては審査で判断するのが難しいと考えるので案1のほうが良いのではないか。

(委員) 事業によっては、単年で成果を出すのは難しく、3年、5年で成果も出るものもあり、事業によると思う。今回、複数年連続で申請されている団体の事業に参加させていただき、地域の子もだけでなく、もっと京丹後市内の子もたちに参加してもらいたいと感じたが、あの場所では地域の子だけで手いっぱいのようなので、毎年継続してやるのであれば、より多くの京丹後市の子もたちが参加できる状態にしていただくことが大切。東京からプロの指導者に来ていただけているのは、申請団体の力が大きいのではないかと思う。単年や2、3年でこの関係性はできないと考える。基本的に3年や5年というのがあるてもよいが、事業によってはというのを考えなければいけない。

(委員) 皆さんもずっと感じておられ、私自身も感じていたこと。悩めるところで、複数年連続で申請されている団体の事業を拝見し、それなりに成果が出ているとは思いますが、最初に何年か続けてこられたときに思ったのは、私が育ったのは丹後ではなく、何かを習いに行くなら別の市町に行ける地域だったので、それ以上のものを子どもが望んだ時には、基本的に親が支援すべきものと考えている。一方で、ずっと長く丹後にいる中で、年配の方たちからは遠方から師匠を呼んで、宿泊費などを負担し、ものづくりの技術を学ぶというのが普通だったという話も聞くので、距離がある土地柄、それなりの支援をしていかないと、私が育った地域とは異なり、月謝だけを払えばいいというものではないことも理解している。はっきりと何とも言えないが、申請団体の事業を見たときに年月がかかるものだと感じたので、何か支援の方法を工夫されて、韓哲補助金以外の別の支援の方法を探るような促し方もあると考える。

(委員) 当該団体は長く同額での申請をされていたのか。

(事務局) 平成 30 年度からスタートし、平成 30 年度については導入のイベント的にされるという中で 17 万 8 千円という額になっている。その後は段階的に増えてきており、最終的には令和 4 年度から 100 万円という額になっており、その間も 40 万円、60 万円と少しずつ増額されている。

(委員) ずっと 100 万円の補助金を受けられていると思っていたが、そうではなく、最初は 17 万 8 千円ということか。

(事務局) おそらく、中身がいい意味で発展し、進展してきていることも事実であり、その部分で経費にかさんでくるという傾向もあると思われる。中身の充実によって増額されているというのが正しい評価だと思われる。

(委員) 子どもを東京に行かせたい、先生を連れてくるという意味で次第に金額が増額されてきたというのは存じ上げている。そうではなく、基金の在り方として、こういう目的がありこの 1 年でこれだけできるという目標があったうえで、我々が審査すべきであり、3 年計画であるなら 3 年計画として最初から出すべき。そうでないと審査のしようがない。外から見れば、ずっと同じ団体が補助を受け取っているのではないのかとなる。そうならないようにするには、どういう目的でどういうふうに達成されるのかという中身を精査しながら、年数を区切った方が良いのではないかと事務局の方で押さえていただき、審査会にはある程度選別されたものを出していただく方が良いのではないかと考えるがどうか。

(委員) その通りだと思う。私も当該団体の事業を見させていただいたが、一番気になったのは、補助金の事業というのは 3 年程度で区切り、3 年経てば自立するというのが基本。補助金をずっと受けて 10 年もやるというのは、今年採択されれば、ずっと採択され続けるということになってしまうので、どこかで区切りをつけたほうが良い。早い段階で団体に通達するべきで、上がってきてしまえば採択せざるをえなくなってしまう。

(委員) 当該団体は事業を通じてレベルが上がってきている中で、これはそもそも補助事業ではなく、教育委員会の総合的な人材育成に位置付け、基金を活用して人材を育てていくという考え方もあると思う。韓哲補助金としては 3 年や 5 年で区切り、なおかつ韓哲夢基金というのは夢のある人を育てるというのが大前提なので、そういった形に移行していくべきだと考える。

(委員) 受け皿をそちらで設けて、ここはスタートということのすみわけをするべき。プロとなれば韓哲とは違った目的となるのでは。

(事務局) 貴重なご意見をいただいたので、一度事務局で整理をさせていただきたい。令和 6 年度ですぐさま切れるものではないので、経過措置が必要と考える。韓哲補助金を受けてスタートした事業が、市の事業に移行していくということも考えられるが、一方で特定の団体に対する補助金になるのでそのあたりの整理が必要。

(委員) チケット代を払うなどいろいろな問題があるのではないかと。

(委員) 同じ取組を行っている団体もあるので難しいところもあるのではないかと。

(事務局) 皆さんが話す方向性が良いと思うが、現在当初予算を締める段階で、直接

執行の予算にこれから整理するのは難しい状況。令和 7 年度の予算に向けて議論していき、直接市が持つような形は可能である。

(委員) 運用の変更は、令和 6 年度にやるということか。

(事務局) いつからまでは想定していなく、要綱改正が必要なので、令和 6 年度は現行のまま募集を行い、令和 7 年度は要綱改正を行ったうえで募集を行う。今回いただいた意見を踏まえ、次回の運用委員会では議事の中で具体的に運用の変更について図らせていただく。

(4) 副委員長あいさつ

皆様からたくさんの貴重なご意見をいただき感謝申し上げます。報告にもあったように今年度はコロナ禍を経て一斉に動き出し、補助金の審査も丸一日ということになった。来年度も同じような形になるかもしれないが、事務局も含め、引き続きよろしくお願ひしたい。